

「日々の理科」(第 3864 号) 2025, -3, -6

「東京近郊日帰り旅行 (9)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

田中 千尋 Chihiro Tanaka

4 年前に導入された房総南部各線用の新型車両は、なかなか乗り心地がよかったです。



近年、JR の近郊型車両は、すべて「ロングシート」が多くなりました。毎日利用する方にとってはそれで良いでしょうが、旅行者というのは車窓風景も楽しみの一つですから、やはりクロスシート (ボックス席) もあったほうが有難いです。幸いこの電車は、車両の一部がボックス席になっているタイプでした。木更津始発だったので、そのボックスシートの海側 (東京湾側) に座ることができました。



この席は正解でした。木更津付近は海側が工業地帯で、煙突やクレーンしか見えません。しかししばらく行くと、東京湾のすぐそばを走るようになります。ちょうど夕日の時間帯で、遠く三浦半島に落ちかけている太陽を見ながら、「旅気分」になれました。列車の車窓から夕日をゆっくり見るのは、羽越本線の象潟 (きさかた) 付近を通った時以来です。



この列車は、館山からそのまま房総半島の線路南端をぐるっと回って「安房鴨川 (あわかものがわ)」に至り、そのまま外房線に直通して「上総一ノ宮 (かずさいちのみや)」まで行く、結構長距離の列車です。しかし私は「浜金谷 (はまかなや)」という小駅で、この列車を捨て (下車し) ました。



通常は内陸に「金谷」という駅があって、海岸近くに「浜金谷」があるのは普通です。「川崎」と「浜川崎」はその例です。しかし、この駅には「本家」に相当する「金谷駅」はありません。まあ、「浜」を冠しているのですから、海に近いのでしょう。



夕暮れの空に、ヤシ（だと思いますが）の木々がシルエットになって、何となく南国の駅って雰囲気でした。確かにこのあたりには冬でも雪はほとんど降りません。

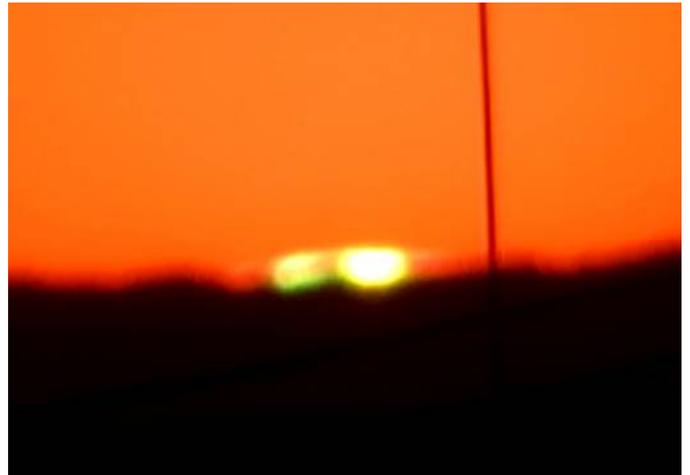


ホームと駅舎を結ぶ跨線橋からは、「鋸山（のこぎりやま）」がよく見えます。正式名称は「乾坤山（けんこんざん）」といい、「乾坤」とは「天地」の意味だそうです。そのごつごつした山容から「鋸山」と呼ばれるのが一般的です。山体の大部分は凝灰岩（ぎょうかいがん）で形成され、江戸時代から採掘が盛んだったそうです。山頂からの眺望はすばらしく、夕日の名所にもなっています。ロープウェイもあるので、次回はこちらに行きたいと思いました。



跨線橋からはちょうど沈もうとする太陽が見えました。その跨線橋で、外国人に日本語で声をかけられました。「アノー、すみません。えーと、太陽昇る時は朝日ですが、太陽沈む時は、日本語ナンデスカ？」たどたどしいが、意味はよくわかりました。日本語で話しかけてきたことに感心しました。私も海外では、できるだけその国のことばで話しかけるように心がけています。英語圏以外の国で、いきなり英語で話しかけるのは、失礼なことだからです。「ユウヒといい

ますよ」と教えました。歳は五十代でしょう。ニューヨークから来て、日本各地を鉄道で放浪しているということでした。「日本の電車は、ジコクヒョ（時刻表）通り走っていて、スバラシイです！」と言っていました。私もいつもそう思っています。



そのまま何人かの旅行者と一緒に、跨線橋の上で「夕日観望会」をしました。太陽の下端が地平線や水平線に接してから、完全に沈むまでわずか2分です。最後の瞬間、太陽の残光が緑色に見える「グリーン・フラッシュ」という珍しい現象も見られたのですが、残念ながら、ピントが合っていませんでした。ニューヨーカーとも刺を交換して、再会を約しました。